

人と自然の関係 どう回復

主催—創造研 後援—総合資格学院

伊東氏 「人間が暮らす最適のエリア」

建築の歴史や意匠の素晴らしさと新たな地域性創造につながる「これからの建築」を語り合う場として、2015年から瀬戸内海に面する地域を巡回して開催している「瀬戸内海文明圏建築シンポジウム」（主催・瀬戸内海文明圏）「これからの建築と新たな地域性」創造研究会、後援・総合資格学院。11月25日に神戸市の神戸大光ホールで開かれた第4回シンポジウム「瀬戸内ニューライフスタイル」で基調講演した建築家・伊東豊雄氏は「建築によって希薄になった人と自然の関係をどう回復させるかだ」と問題提起した。

瀬戸内海文明圏建築シンポジウム



伊東氏はまず、食堂の内観設計を担当した世界遺産・薬師寺（奈良市）の白鳳伽藍復興プロジェクトについて説明し「田淵俊夫さんが手掛けた壁面には、遣唐使が中国からさまざまな文化を藤原京に持ち帰る様子が描かれている。遣唐使は下関から瀬戸内海に入り、大坂に帰ってきた。文化の伝来が瀬戸内海を通じて行われた」と述べ、「瀬戸内には人口100万人前後の都市が集中している。非常に住みよいスケールで、災害も少な

品の家（広島県廿日市市）などを紹介。「丹下さんは『私の素朴な機能主義の建築観は、この広島島の体験によって大きく揺さぶられた』と言っている。同じように並べるのはおこがましいが、わたしも東日本大震災で津波被害を受けた三陸海岸を見ながら、同じようなことを考えた」と振り返った。

伊東氏



また、「わたしが初めて瀬戸内で手掛けたのが松山ITM本社ビル（松山市）。長谷川さん（愛媛県今治市）や、それが建つ大三島の活性化に向けた取り組みを紹介。「大山祇神社が大三島の中心的存在なのだが、しまなみ街道ができてから、参道は寂れてしまった。活動のかがあって、いまでは少しずつ移住者が増え、活気が戻りつつある。決して観光地にしたわけではない。瀬戸内ならではのライフスタイルを模索している」と思いを語った。

古谷氏



古谷氏 「活性化はプロセス共有が重要」

谷に縁があるが、いまではだいぶ様変わりしてしまった。これからも多くの超高層ビルが建つらしい。高層化すればするほど自然と人との関係、人と人との関係が絶たれてしまう。現代の建築に課せられたテーマは、自然と人との関係をどうやって回復させるか。震災以降、『みんなの家』を通じてそんなことを考えているが、少しずつ前進しているように思う」と話した。最後に「2019年は直島で精力的に活動されている安藤忠雄さんにも声を掛けて『瀬戸内建築会議』を開きたい。若い人たちに集まってもらい、盛大に開催したい」と構想を語った。シンポジウムでは、日本建築学会会長を務める古谷誠章早大教授、槻橋修神戸大准教授、坂東幸輔京都市立芸術大講師が講演した。

古谷教授は「住まうこ」暮らしすこと—四国から見た瀬戸内、本州から見た瀬戸内」をテーマに、広島県にある近畿大工学部で講師・助教授を務めていたころのエピソードを話し「広島には、東京にない豊かさや穏やかさがあった。四国では自然環境との共生の姿勢に驚かされることが多かった」と述べた。

また、中国・四国地方での作品、主導した小豆島や島根県雲南市の活性化プロジェクトなどを紹介し「そこに住んでいる人たち、特に子どもたちといかにプロセスを共有するかが重要。そして、地元の人々が楽しんで活性化に取り組めるプログラムであることが大事だ」と話した。

ジャーナリスト だとしても、誰ち入れない悲劇世界に知らしめがある。政府にだけに頼りきることもある。海識者がこぞ、疑問視している

ジャーナリスト 安田純平氏の拘束・解放をめぐる日本ではさまざまな意見が飛び交ってきたが、多くは批判的意見で、自己責任を問うことに集約されている。安田氏本人もおおむね感謝を表明し、自らの非を公にしている。

しかしながら、海外では「国境なき記者団」を始め、安田氏の行動はむしろ称賛されるべきで、謝罪などする必要はないとする意見が大半を占めている。

建

2018年12月5日
建設通信新聞

しかしながら、問題の本質はそこにはない。そのような問題

する問題を見なければ、何もその本質は見えてこないというところなのだ。当事者を指摘するよりも、むしろ問題を引き起こす状況に迫り、放置してきた業界や企業の構造に潜む問題を指摘しないままでは、事後の是正には何も寄与しない。さらに言えば、設計事務所や監理責任、検査・監査機関の問題でもあるのだ。このような状況で、品質管理を問うTISOは機能しているのだろうか。

安田氏の問題は、複雑な現代社会に突き付けられた1つの問いであり、ジャーナリズムの役割や社会的貢献に対する問題提起である。軽々しく非難すべき問題ではない。政府始め、日本